本の紹介

伊与原新著「オオルリ流星群」

KADOKAWA, 296p, 2022 年 2 月 18 日発行
1,600 円（税別）, ISBN978-4-04-108566-0

まず，Wikipedia にも載っているような情報をまとめておきたい．ここで紹介する『オオルリ流星群』の著者，伊与原新氏は 1972 年生まれ，大阪府吹田市出身の小説家である．神戸大学理学部地球科学科，東京大学大学院博士課程理学系研究科で，地球惑星科学を修め，博士号を取られた．その後，富山大学理学部での研究・教育のかたわら小説を書き始め，やがてその道に集中することとなる．

2022 年 9 月，伊与原氏は，日本地質学会から「地球惑星科学研究をいかした小説発表とそれによる科学知識の普及」により学会表彰された．受賞理由によると，「読者は SF の物語の世界で想像する楽しさを味わいながら，科学の知識と考え方についても知ることができる」とし，「小説による国民への地質学の科学知識の普及」と総括されている．

しかしこれは，氏の小説が，小説という媒体を使い地球惑星科学的な現象やイベントを面白おかしく紹介することを目的としている，という意味ではない．地球惑星科学的な現象やイベントは，背景やスパイス，比喩など，様々なかたちで物語に投影され，ときに登場人物により解説される．また，科学の現場で生きる人たちも活き活きと描かれ，重要な働きを担う．氏の専門的な知識や研究者として「業界」に身を置いた経験が，存分に生かされたかたちだ．

『オオルリ流星群』の場合，海王星より遠くに広がるカイパーベルトが話の核になる．「あとがき」によれば，ビッグサイエンスが当たり前となったこの時代に，京都大学の有松亘氏を中心とするグループが，一般向けの小型望遠鏡を用いて，大きな科学的な発見をしたことが執筆の動機になっているらしい．彼らは工夫を重ね，史上はじめてエッジワース・カイパーベルトに存在する半径 1km 程度の極めて小さな天体の観測に成功した．これは原始太陽系における微惑星の真の生き残りと考えられるが，発見に至る挑戦と見事な研究成果に，伊与原氏が心打たれたことが，この作品を生む原動力となった．

なるべくネタバレにならないように注意しつつ，本作で扱われている題材をキーワード的に羅列すると，流星群，研究者の期限付き雇用，思春期，友情，恋愛，時代を象徴する歌，受験，失われた世代，会社，仕事，引きこもり，地元への U ターン，地方都市への大規模店進出，家族，老い，などであり，最初の二つを別にすれば，一般の小説のテーマと同様だろう．

この作品『オオルリ流星群』は多くの読者から支持され，みごと 2022 年「読書メーター」年間ランキングの第１位に選出されている．この賞は，2022 年 10 月までの 1 年間に投稿された累計 219 万におよぶ感想・レビューから集計された年間おすすめ本ランキングとのこと．芥川賞や直木賞のように，同業小説家からなる選考委員会による選出ではなく，読書好きな市井の人々に選ばれたことになる．この物語を読み進める上で，地球惑星科学的な色彩が一般読者の障害になっていないことがわかる．

本賞の受賞を受け，出版元の KADOKAWA の音頭取りで，Twitter では「オオルリ感想マラソン」というハッシュタグが立ち，全国の書店従業員さんから，感想・コメントが寄せられている．そのなかには，登場人物たちへの共感の声が多く見られる．これらは記名での，かつ書店名を背負っての感想・コメント発信なので，書店のなかでも「それなりの立場」の方が書かれたのであろう．まさに，『オオルリ流星群』の登場人物たちと同じ，家庭・会社・社会の中心を担う働き盛りと想像する．大きな夢を持って，もしくは行きがかり上などなど，書店で働いている理由は様々であろうが，ともかくも毎日毎日を必死に切り盛りしていかなければならない境遇の方々の心を揺さぶり，登場人物へ感情移入せざるを得ない，というのがこの小説の特徴であり，持ち味でもある．

地球惑星科学に興味を抱くきっかけとして，もしくは家庭・会社・社会を支えている人たちの物語として，読みどころ満載の『オオルリ流星群』．周りの景色を変える力を有する本物語を広く推薦したい．

（茨城大学　伊藤　孝）

2023.1.7 **受付**
2023.1.24 **学会ニュースレーター案内**
2023.1.24 **学会ホームページ公開**

みんなの地学